

## 〔資料紹介〕

### イビサ島における一九世紀の人口構成

——サン・マテオ教区を事例として——

栗原尚子

#### 一 序

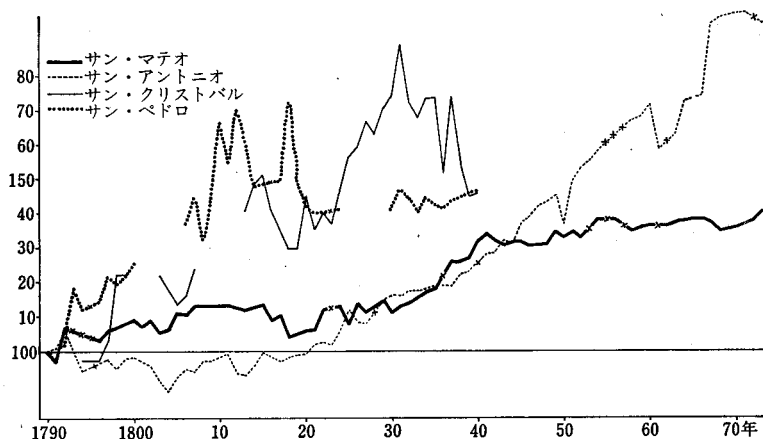
本稿は、スペインのバレアレス諸島の一島、イビサ島の一教区に関する一九世紀の人口動態を示す資料を紹介し、それから得られる知見のいくつかをまとめるものである。

この資料は、一七八六年から一八七〇年までの期間にわたって、教区の牧師がイビサ司教にあてて送付した教区の人口構成を示すものである。一七八六、一七九〇、一七九四、一七九六—一八二二、一八二五—一八二六、一八三八、一八四四年の各年については、教区内の各家族を単位として、家族構成員の名前、家族内での統柄、年齢がそれぞれ記されており、残りの年については、教区の総人口、家族（戸数）、既婚・未婚別人口数、結婚数、出生数、死亡数のみが記されている（以後の行論で便宜上、前者の資料をⅠ、後者のものをⅡとする）。筆者

は、すでにこの資料を使って、一七九〇年から一八七〇年までのサン・マテオ教区の総人口の推移を、他の教区の人口推移と対照させながら明らかにした<sup>1)</sup>。本稿では、その際に分析されなかった資料Ⅰを中心に、一七九六年から一八二五年までの人口動態の一端を明らかにしたい。本論に先だち、この資料Ⅰの性格を整理しておくことが重要であろう。

まず初めに、資料Ⅰは、一八〇〇年を境として二人の牧師によって作成されている。作成月は、一八〇〇年代は一八〇三年の七月を除き四月と五月で、以降は六月が主体である（一八一三年は九月）。記述は、一八一五年以降、JosepがJoseと、BonetがBonedと記されるようにカステイリヤ語式になっている。しかし、最も問題になるのは各人の年齢の正確さである。それぞれの家族ごとに、この期間の資料を書き込んだカードを作成した結果、各人の年齢が年を追って一貫性をもっていないということが明らかになり、その欠陥はとくに一八〇〇年以前および高齢階層ほど大きい。したがって一八〇〇年以前の年齢を逆算しなくてはならないという作業が必要である。各人の年齢がどのように調べられたかは不明であるが、高齢階層の年齢の不正確さは教区の創設年とも関連している。サン・マテオ教区の創設は、一七八五年で、この年に、イビサ島に司教区が創設されており、従来の一島一教区から十六の教区に区分された時である。従って、それ以前の教区に関する資料は全くなく、洗礼名簿による年齢の確認は不可能である。また現存の最も古い埋葬名簿をみても、高齢階層の年齢は、例えば約九〇歳と記

図1 イビサ島における4教区の人口推移(1790—1870) (1790; 100)



引用：拙稿「イビサ島における19世紀の人口について」、『地中海地域における集落形成の諸問題』1980, P.105

されるなど正確さに乏しい。現代的意味で、各人の年というものが正確さを要求されることのない社会で、各人それぞれが自分の年齢をどれだけ正確に意識していたかどうかもまた考慮されることである。

第二に、この資料Iの分析によって、資料IIでは得られない人口動態の特徴を示すことが可能である。いうまでもなく、資料Iは、近年急速に進展している歴史人口学の分野での家族復元を示すものである。洗礼名簿と埋葬名簿から再構成される家族復元の研究が、一世紀を単位とした長期間的分析であるのに比して、三〇年間という期間が限られている点に問題が残る。

しかし、家族の構成、出生、結婚、死亡、世代交替、家族からの独立など年齢階層ごとに知ることができ、わずか三〇年間とはいえず、各々の家族ごとに構成されたカードは、それぞれの家族が演じたドラマを垣間みせてくれる。現存の資料が非常に限られている時代の、人々の具体的な生活の有様の一端を示す資料として、著者がとくに関心をもつ点である。

最後に、事例としてとりあげたサン・マテオ教区にふれておくならば、サン・マテオ教区は、イビサ島の北東部に位置する農村で、一九六〇年代に始まるイビサ島の急激な観光地化に伴い、一九五〇年代から約四半世紀の間に居住人口が半減するほどの急速な人口流出をみたところである。

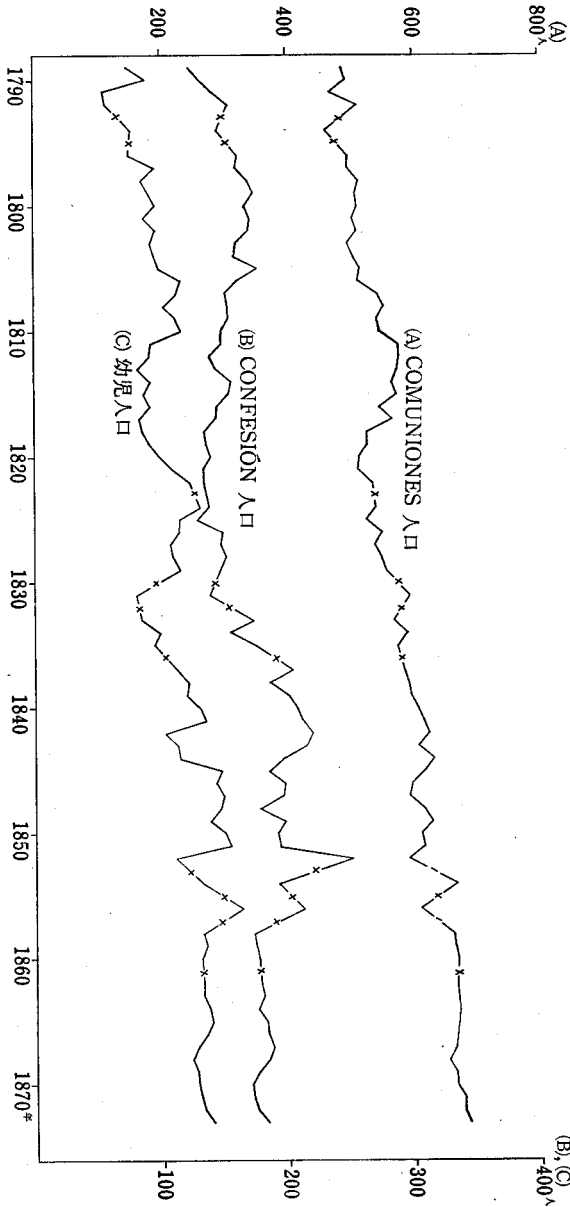


図 2 チェ・マテオ教区の宗教階層別人口構成推移 (1799—1873)

## 二 総人口の推移

### (一) 出生率・死亡率

本稿の分析対象である一七九六年から一八二五年までの総人口の推移を、一九世紀の総人口の中でみるならば、一八三〇年

代の人口急増期を経て、一八四〇年代以降の安定期に至る前期、換言すれば、この時期の人口構成は、近代社会へ離陸する直前の社会の諸様相を表わしているといえる。一七八七年から一八三三年までのスペインの人口を近代的人口史第二期として他の時代から区別し、「人口学的危機」の時代としたデ・ソリスの

分析に対応しており、基本的には、旧体制の崩壊過程に農村社会を襲った自給経済の危機を反映している。

さらに詳しくこの時期をみると、(1)一七九六—一八〇〇年の増加期(増加率五・九%)、(2)一八〇〇—一八〇四年の減少期(増加率マイナス二・五%)、(3)一八〇五—一八一五年の停滞的安定期、(4)一八一六—一八二二年の減少期(増加率マイナス六・九%)が区別できる。出生率・死亡率からこの傾向をみると、(2)の時期は、平均出生率三二%、平均死亡率四六・一%、(3)の時期は、三一・四%、一九・〇%、(4)の時期は二三・二%、一八・三%となる。(2)の時期の人口減少は、高い死亡率によって、(4)の時期の人口減少は低い出生率によって特徴づけられている。とくに(2)の時期における一八〇二年と一八〇三年、(4)の時期における一八一六年と一八一七年の死亡率の高さが顕著である。一八世紀のガリシア地方の大西洋岸地域の人口史を詳細に分析し、伝統的社会的人口学的諸特徴を明らかにしたベレス・ガルシアは、出生率と死亡率の傾向から二つの類型を検出している。死亡率が出生率をいずれも凌駕する例であるが、死亡率と出生率のピークが一致しない型を自給経済危機型とし、他方、それぞれのピークが一致する場合を疫病による危機型として二つの型を区別している。この類型を参照にするならば、一八〇二—一八〇三年および一八一六—一八一七年の人口学的危機は、自給経済の危機型を示している。一八〇三年の高い死亡率の内容を、埋葬名簿を利用して年齢階層別にみてみると、一〇歳未満が全体の四八・八%を占め、一九世紀後半の人口増加

表 1 サン・マテオ教区の出生率・死亡率および結婚数の推移 (1796—1825)

年	出生率、死亡率%									
	1796	1797	1798	1799	1800	1801	1802	1803	1804	1805
出生率	27.3	39.8	27.5	14.2	49.6	32.6	29.6	20.0	33.0	51.6
死亡率	—	43.8	—	—	28.4	19.6	55.3	37.0	9.2	13.9
結婚数	2	4	5	1	5	4	1	3	0	5
年	1806	1807	1808	1809	1810	1811	1812	1813	1814	1815
出生率	22.8	38.4	28.4	31.0	18.5	24.6	27.3	28.9	41.9	32.0
死亡率	15.2	11.2	9.9	14.9	25.9	39.3	17.4	13.8	12.3	35.7
結婚数	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
年	1816	1817	1818	1819	1820	1821	1822	1823	1824	1825
出生率	24.4	20.2	16.1	20.0	26.5	31.7	31.2	—	27.2	22.1
死亡率	30.8	39.1	6.7	9.3	14.6	9.2	8.7	—	16.1	3.1
結婚数	1	8	4	5	4	3	3	—	2	2

期における低い幼児死亡率と対照的傾向を示しており、一九世紀前半の人口の特徴を表わしている。この時期の出生率は、他の地域の研究事例と比較すると判るようになり低い。例えば、ホルデイ・ナルのこの分野における先駆的業績によると、カタロニア地方の四三

教区の出生率は、一八〇二—一八〇六年の平均を一〇〇としてみると、一八二二—一八二六年には一一五・六となっている。またバレイロ・マロンによるガリシア地方の研究事例では、一二四・七となり、出生率の上昇を示している。が、サン・マテオでは、八八・七となり、一八〇二—一八〇六年以降の五年間毎の平均出生率はいずれも一〇〇以下の数値を示しており、出生率の低さが際だっている。

### (二) 結婚

結婚数の推移は、表1に示す通りであるが、傾向として、一八〇〇—一八〇四年および一八一六—一八二一年の人口減少期に結婚数が減少していること、反対に比較的安定した一八〇五—一八一五年には、その数が増加していることが指摘できる。結婚時の平均年齢をみると、一八〇〇—一八〇四年には、女性が二四・二歳、男性が二三・六歳、一八〇五—一八〇一五年には、それぞれ二一・三歳と二六・五歳、一八一五—一八二五年には、二一・六歳と二三・六歳となっており、人口安定期の女性の結婚年齢の低下と、両性の年齢差の拡大が特徴的である。前述の結婚年齢は、サン・マテオ内での結婚の場合であるが、一八〇一年と一八一五年の人口ピラミッドを作成してみると、前者においては、女性の二五—二九歳の年齢階層、後者においては二〇—二四歳の年齢階層が急激に減少しており、一般的にこの年齢階層が結婚年齢階層による流出を表わしていると考えられる。本稿で分析の対象としている資料Iあるいは、資料IIでは通婚圏を正確に知ることができないが、埋葬名簿には、埋葬者の両

親の出身地が記されている。サン・マテオの西隣りのサンタ・イネスがサン・マテオ以外では最も多く、その他、南のサン・ヘルトゥデイス、東のサン・ミゲルあるいは中心地であるサン・アントニオ、サン・ラファエルがあげられている。通婚圏は、ほぼこれらの地域をおおうサン・アントニオのムニシポオの領域と一致しているといえる。

結婚年齢に話をもとずならば、前述のサン・マテオ内での結婚の事例が、各家族の後継者(ほとんどの場合長男)であることを、結婚年齢を考察する場合に考慮しなくてはならない点である。この地域の相続についての慣習は、カタラン法に基づく均分相続であるが、後に分析する戸数の変化あるいは再構成した各々の家族カードをみても、現実には、長子相続と同じ形態を示している。従って、相続者以外の男性の結婚年齢が、同じような傾向を示しているかどうかは、不明である。この問題に関して、レヴィ・パッシは、一七八七—一七九七年の農業労働者の割合と四〇—五〇歳の男性人口に占める独身者の割合の高さから、農業労働者の結婚年齢が高いと結論したが、ホルデイ・ナダルは、むしろそのような明確な関係はみられないことを指摘している。

最後に、男性の独身率についてふれておくならば、レヴィ・パッシの研究では、四〇—五〇歳の男性人口に占める独身者の割合は、バレアレスは一六・九%(スペインの全体の平均は一一・九%)で、アンダルシアに次いで高い。ムルシア、カタルーニア地方も平均をこえ、地中海地域の人口構成の一特徴となつて

表 2 サン・マテオ教区の家族構成の推移 (1796—1825)

年	戸数	人数別家族数					年	戸数	人数別家族数				
		A	B	C	D	E			A	B	C	D	E
1796	119	10	53	42	14	20	1811	129	22	51	42	14	9
97	122	18	50	40	14	17	12	130	22	51	43	14	9
98	124	15	53	41	15	17	13	128	22	51	42	13	12
99	128	18	55	38	17	17	14	130	22	46	43	19	18
1800	133	15	56	41	21	18	15	133	22	47	43	21	15
01	141	11	56	48	26	11	16	133	22	49	46	16	16
02	130	13	51	44	12	9	17	131	22	49	46	14	13
03	125	10	50	47	18	4	18	125	20	48	47	10	18
04	126	11	50	49	16	11	19	124	14	48	50	12	27
05	132	17	51	49	15	21	20	124	16	45	49	14	22
06	127	20	50	47	10	15	21	124	17	48	43	16	20
07	130	20	49	44	17	17	22	124	16	52	44	12	32
08	128	18	53	43	14	10	23	—	—	—	—	—	—
09	129	20	55	40	14	10	24	125	19	46	49	11	19
10	129	22	53	40	14	9	25	125	18	46	48	13	15

A 10人以上, B 9~6人, C 5~3人  
D 2~1人, E 家族外の人口数

いる。サン・マテオでもこのような現象が指摘できる。男性のみでなく、女性が家族内に留まる事例も多く、特に家族内の労働力構成からみてその例がみられる。  
年齢構成の分析は、すでに行なったので、本稿においては省略する。

### 三 家族構成

#### (一) 戸数の変化

まず初めに、ここで分析する家族とは複合家族を意味している。すなわち資料 I において、例えば Casa Carlona, Casa Callarga などのように Casa の単位でまとめられた家族をさしている。この casa (家の意味) のあとに姓名のみならず、地名、植物、動物、地形、職業など様々な名称がつづけられ、一種の屋号を示している。この現象は、サン・マテオだけでなく、イビサ島の農村に一般的にみられ、この一つの屋号のもとに、二三世代の家族あるいは兄弟夫婦や親類縁者が居住している。資料 I は、屋号ごとに家族の構成員をまとめ、さらに直系の家族以外の家族が含まれている場合には、別の familia として区別している。が、本稿では、屋号の下に統合された家族の単位が、社会的には一つの家族として実質の意味をもっていていることから、この単位を家族として分析することにした。

家族数の推移は、表 2 に示すとおりであるが、この時期の家族数は、一八三〇年代以降の人口急激期における増加に比して、ほとんど変化を示していない。が、一八〇三年の減少と一八一八年以降の停滞とが指摘できる。その内容を見ると、一七九六—一八二五年の間にあらわれた屋号の数は一六九に達する。このうち一つの家族によって連続しているものは、九八のみである。五年以下の居住しか記されていないものが二八、同じ屋号でも姓名のみからでは姻戚関係が判然としないもの一二となっ

ている。したがって、家族数の変化が示す傾向以上に、家族の流出入は多いといえる。

(一) 家族の構成

家族の構成の変化をまず、構成員別家族数によってみると(表2参照)、一八〇五—一八一五年の人口安定期ほど一〇人以上の家族が多く、一八〇〇—一八〇四年の人口減少期には減少していることが指摘できる。また、三人以下の家族の割合が多いことが特徴的である。

一〇人以上の構成員から成る家族を、一八一〇年を例にみると、三世代から成るものが一六で、四世代にわたるものは二家族のみである。子供の数は、分析対象期間にちょうど出産可能期にあたり、しかも配偶者がこの間顕在である場合をみると、平均七・八人となっている。また第一子出産の平均年齢は二〇歳で、また最後の出産年齢は四三歳となっている。典型的な例は、二〇歳—四〇歳まで九人出産している。分析対象期間に生産の時期の一部がかかる例も含めて、最後の出産の平均年齢をみると四五歳となる。出産間隔は二—三年が最も多い。

労働力構成という点から家族構成をみると、其幹労働力として最低三人が基本となっている。労働力構成という点から注目されるのは、家族構成員の最後に *criado*, *criada* として記されているものである。延三六五人のうち一〇歳以下のものが全体の二二・五%、一一—一九歳のものは六四・九%、二〇歳以上のものは一一・六%を占める。なかでも一〇歳前後の階層が多く、このことは、*confession* を経た後、一人前の労働力とみな

されることを一面で物語っている。その実態は、親類であることもあり、純粋な意味での雇用労働力と容易に規定することはできない。これら家族外の労働者が記されている家族の場合をみると、一つには、夫婦のみで他の其幹労働力がない場合、とくに幼児期の子供数の多い場合などがあげられる。同一の家族内に留まる年数は、二—三年ぐらいで、長期的に留まる例は、むしろ例外的である。一九五〇年の住民台帳にも、この *criado* に相当する層が、まだみられ、そこでは牧夫と記載されている。労働の内容は、主として家内労働と、牧畜の世話であったと考えられる。一九六〇年の住民台帳では、二人のみが記され、この地域における牧畜の衰退を反映している。

最後に、家族内に *ventura* と記されている例、そして埋葬台帳にしばしばそのように記載されている例がある。辞書による字義通りの訳は幸福であるが、両親不明の者というのが実態である。教会の前で発見されたという例が多い。成人すると、前述の *criados* になる。

四 結び

本稿においては、サン・マテオ教区の人口構成の実態を、資料Iの分析を基礎にして明らかにした。資料Iの分析にこだわったのは、この資料を利用することにより、先の資料IIの分析では不可能であった人口の流出入の実態が、どの程度までおさえられるかということにある。この時期の生活の実態を人口構成の分析からさぐるという目的は、一応それなりに達せられ

だが、人口の流出の実態は、予想したようには進まなかつた。その一因は、年齢の記載が一貫していないことにある。連続して居住している限りは、逆算してより正確な年令を判別できるが、短期の場合は不可能である。そして何よりも障害となつたのが、名前の問題である。姓字は、トーレス、ツル、ボネット、ブラネラス、ラモン、リエラ、ロイグ、エスカンデル、セラにつきる。一方、名前は、男性の方は、アントニオ、フランシスコ、ホセ、ジョアン、ミゲル、ビセンテ、マリアーノ(列記した順序はほぼ第一子から順番につけられる名前である)、女性の方は、アントニア、カタリナ、エスベランサ、フランシスカ、イサベル、マリア、マルガリータで尽くされる。この組みあわせでは、延二万数千の個人を確認することは、Cada のもとの結合をとりはらつたとき不可能に近い。年齢による確認ができれば、ある程度問題は解決するかも知れないが。しかし、祖母、父母と同じ名前が継承されていくあるいは伯(叔)父、伯(叔)母、イトコと同じ名前がつけられ継承されていくというつながりの社会の方に、むしろ関心がよせられる。

しかし、家族数の変化のところはかなり流出入があること、分析対象期間が連続している家族の場合には、一度流出した者が短期間であっても一時戻ってくる例があること、そして、結婚で流出した娘が、配偶者の死により子供とともに実家に帰る例がかなり一般的にみられること(もともと再婚の可能性があるような年齢の場合である)などが、明らかにしたが、全体としての人口の流出入は正確に把握できない。

イビサ島の一九世紀の人口史というには、本稿の分析対象期間の限定、およびサン・マテオというわずかな人足らずの地域のみ分析という点で、問題が残されている。また常にこのような分析において痛感されることであるが、人口動態の分析およびその解釈の基礎となる他の資料が欠けていることなど問題は多い。とくに、本稿の場合のように短い期間の、しかも人口構成という用語で代替された内容の分析になるほど、長期的な歴史人口の研究で参照される経済的要因のみでは分析できない側面が多くなる。そしてこのような社会的と形容しうるような要因の分析が重要と考えられても、その反面で経済的要因以上に資料が限られてくるという問題に直面する。今後の研究業績の蓄積が期待される分野である。

全く最後になつてしまつたが、資料 I、II の正式名称は、*Arxiu Historic de la Pabordia, Relación anual que los parrocos debian mandar al Obispo. Parroquia de San Mateo.* である。イビサ市の古文書館にて入手したものである。

資料の閲覧にいろいろ便宜を図つて下さり、イビサ史研究の優れた業績を残していらつしやる Joan Mari Cardona 氏および洗礼名簿、埋葬名簿の閲覧を心よく認めて下さつたサン・マテオ教区の Antonio Costa 神父に御礼を申し上げます。

(1) 拙稿「イビサ島における一九世紀の人口について」『地中海地域における集落形成の諸問題』一橋大学地中海研究會会刊 一九八〇 一〇一—一六頁。



- (2) 拙稿「スイートン地中海島嶼の伝統的農村における最近の變化」『一橋論叢』八〇巻 六号 六五—八八頁。
- (3) Romero de Solís, Pedro, *La Población Española en los Siglos XVII y XIX*, Siglo XXI.
- (4) José Manuel Pérez García, Demografía tradicional en dos localidades de la Galicia Atlántica, *Metodología de la Historia Moderna, Economía y Demografía*, Universidad de Santiago de Compostela, 1975, pp. 437—461.
- (5) Jordi Nadal, *La Población española (siglos XVI a XX)*, Ariel, 1966, pp. 131—142.
- (6) Baudilio Barreiro Mallon, Demografía y crisis agrarias en Galicia durante siglo XIX, *Metodología de la Historia Moderna, Economía y Demografía*, Universidad de Santiago de Compostela, 1975, pp. 477—503.
- (7) *ibid.*, p. 96—105.
- (8) Juan Castello Guasch, Toponimia de Ibiza y Formentera, *Boletín de la Camara Oficial de Comercio, Industria y Navegación de Palma de Mallorca*, No. 639, 1963, pp.
- (9) Antonio Costa Ramon, Apuntes sobre los Apellidos en las Islas Pitiusas, *Boletín de la Camara Oficial de Comercio, Industria y Navegación de Palma de Mallorca*, No. 644—645, 1964, p. 179.

(一橋大学助手)